

社会(中)部会

I. 研究の概要

1. 研究主題 変化が激しい時代を乗り越え、自ら社会を創造する子どもの育成
～思考・判断・表現の力を高める単元デザインの工夫を通して～

2. 主題設定の理由

石中社では、平成22年度から「未来をきり拓く力をつけた子どもの育成」という研究主題を設定し、平成29年度まで3次にわたる研究に取り組んできた。平成30年度からは主題をそのままに、副主題を「社会的な見方・考え方を働かせて、学びを深める授業と教材・教具の工夫」と定め、2年計画で「社会的な見方・考え方」を働かせて、思考力、判断力、表現力を更に深めるための研究を進めることとした。

そして、昨年度から新しい「研究主題」のもとで研究を進めたが、新型コロナウイルス感染症の影響で、部会員とともに研究を深めるまでには至らなかった部分がある。そこで、今年度も引き続き同じ研究主題で、昨年度の研究をさらに深化させるべく実質の1年次の研究として位置付けている。

21世紀の社会は知識基盤社会であり、新しい知識・情報・技術が、社会のあらゆる領域での活動の基盤として飛躍的に重要性を増している。それは今後も変わらないと捉えられるが、近年、知識・情報・技術をめぐる変化の早さが加速度的となっており、情報化やグローバル化といった社会的変化が、人間の予測を超えた進展が顕著になってきている。「第4次産業革命」ともいわれる進化した人工知能によって「人工知能が人間の職業を奪うのではないか」といった未来予測も多く発表されていたり、グローバル化が進展する中で先を見通すことがますます難しくなったりしている。このような「変化が激しい時代」だからこそ、社会科教育の担う役割は大きいと考える。

主題が掲げる「自ら社会を創造する」とは、上記のような変化が激しい時代を乗り越えるために、「子どもたちが自信を持って自分の人生を主体的に切り拓き、よりよい社会を創り出していくこと」と定義付け、そのために必要な「未来社会を切り拓く力」を確実に育成していくことを目指していくものとする。

3. 研究仮説

単元を貫く学習課題を適切に設定し、指導内容や学習活動に応じて工夫した授業を展開することで、思考・判断・表現の力を高め、主体的に社会に関わる力やコミュニケーション力などの力を身につけた「自ら社会を創造する子ども」を育成することができるであろう。

4. 研究の年次計画

【1～3年次】 思考・判断・表現の力を高める単元デザインの工夫を通して

5. 研究方法

- (1) 市町村研究部会と連携を図り、推進委員を通して部会員に研究内容を周知して、個人単位または学校単位で課題に取り組む。そして、その成果を専門部会第二次研究協議会で交流する。
- (2) 研究内容を踏まえた授業について、公開授業担当市町村から出された授業者と共同研究者、本部会役員等で検討を重ね、専門部会第二次研究協議会で公開する。また、北・中・南の各ブロックで研究授業を公開し、研究協議を行う。
- (3) 研究員およびプロジェクト研究員（小委員会）が中心となって研究試案を作成し、本部会のHPにアップする。

Ⅱ. 実践の経過と成果

1. 実践研究の経過

4月13日(火) 中旬	専門部会第一次研究協議会、第1回役員研修会、第1回推進委員会 →今年の部会研究についての確認 市町村第一次研究協議会
5月11日(火)	専門部会役員研修会 →今年度の部会研究の進め方について
6月3日(木) 22日(火)	第1回指導案検討会、第2回役員研修会 →研究授業の指導案検討、専門部会の活動について 第1回事務局長研修会
7月20日(火)	第2回推進委員研修会 第3回役員研修会 →専門部会の活動の進め方について 今年度の研究の見通しについての周知 各市町村の部会員への周知のお願い
8月10日(火)	実技理論研修会 →「社会科教育におけるICTの活用」について 北広島市立広葉中学校 堀部秀成教諭、光野明彦教諭
9月9日(木) 14日(火) 17日(金) 29日(水)	プロジェクト研究員による提案授業 授業会場：北広島市西の里中学校（小向宗幸教諭） 第4回役員研修会 第3回推進委員会、第5回役員研修会 →公開授業指導案検討 公開授業撮影 石狩市立花川北中学校 下山 望教諭（地理分野） 公開授業撮影 石狩市立花川中学校 廣中 未来教諭（歴史分野）
10月15日(金)	専門部会第二次研究協議会 全体会場：北広島市立広葉中学校
11月16日(火)	第6回役員研修会 →今年度の反省・総括 『石狩の教育』原稿提出（研究員）
1月中旬	第3回推進委員研修会 第7回役員研修会 →今年度の反省・総括 次年度の研究の方向性について 「石教研情報」原稿提出（副部長）
2月上旬 中旬 下旬	各市町村第三次研究協議会 →次年度研究内容の概要提示 レポート交流・丁合 第4回推進委員研修会 第8回役員研修会 →レポート製本 「会計簿」「部会活動記録綴り」提出（事務局次長）

2. 研究を推進するためのプロジェクト試案と研究授業について

(1) 今年度の研究について

今年度も、新型コロナウイルス感染症の影響もあり、第二次研究協議会をはじめ、様々な研修会や公開研究授業等が以前のような状況で行うことは難しかった。このような状況の中で、各市町村の推進委員の先生方にご協力をいただきながら、共同研究の歩みを進めることができた。

研究を進めるための参考に、夏休み前に研究員による試案をホームページに掲載した。

授業公開については、三分野（地理・歴史・公民）公開の取組を進めるため、プロジェクト研究員の試案による授業、二次研究協議会での二本の授業を行った。一昨年までは、プロジェクト研究員の試案を三つ、さらにその中の一つの授業公開を行っていたが、今年度は試案を一つにしぼり、授業公開を石狩管内全域にリモートで公開することができた。以下は、今年度プロジェクト研究員が授業公開した試案を掲載する。

(2) 公民的分野公開授業交流

プロジェクト研究員：小向 宗幸 教諭（北広島市立西の里中学校）

段階	○学習活動	●予想される児童生徒の反応	*教師の支援	評価規準	◇評価方法	●留意点
導入 (5)	<ul style="list-style-type: none"> ○前時までの復習の発問に答える。 ○精神活動の自由：信教の自由、学問の自由 ○個人の尊重が人権の根拠にあることを確認 ○憲法21条の条文の確認 ○資料集p41『北海道ヤジ事件』の内容を読み、ヤジは表現の自由として許されるかどうか考える。 ●ヤジは許されない。 ○本時の課題、流れを確認する。 	<ul style="list-style-type: none"> ●予想される児童生徒の反応 	<ul style="list-style-type: none"> *教師の支援 	<ul style="list-style-type: none"> 評価規準 	<ul style="list-style-type: none"> ◇評価方法 	<ul style="list-style-type: none"> ●留意点
展開 (1)(3)(4)(5)	<ul style="list-style-type: none"> ○『ヤジと民主主義』の映像を流す。(約12分) ○3人の表現の自由が認められるべきかどうかをその理由も併せて記入する。 ○ペアで交流(1分) ○全体で交流(3分) ●認めない・聴いている人の迷惑だから。 <ul style="list-style-type: none"> ・演説の妨害だから。 ・意思表示は選挙すべき。 ・警察が止めているから ●認める <ul style="list-style-type: none"> ・街頭演説は、賛成の人も反対の人も聞いている場だから。 ・プラカードの人物は認める。 	<ul style="list-style-type: none"> ●3人の表現の自由が認められるべきかどうかをその理由も併せて記入する。 	<ul style="list-style-type: none"> *教師の支援 	<ul style="list-style-type: none"> 評価規準 	<ul style="list-style-type: none"> ◇評価方法 	<ul style="list-style-type: none"> ●留意点
まとめ (6)	<ul style="list-style-type: none"> ○ヤジ自体は、表現の自由で認められているが、警察は「トラブルになる、事件になる可能性があるから止めた」 ○選挙の際には、多少かれ少なけれヤジはある。 ○「許める」「反対」は意見である。 	<ul style="list-style-type: none"> ●ヤジについての最高裁判決(1948年)を紹介する。 ○北海道警察警備部のコメント、警察官職務執行法4、6条を確認する。(映像1分) ○議員事務所に行った内容を話す(国会議員3) ○教科書p44「国の政治に国民の意思がどれだけ反映されているか」を確認する。 ★知識・技能の習得 	<ul style="list-style-type: none"> *教師の支援 	<ul style="list-style-type: none"> 評価規準 	<ul style="list-style-type: none"> ◇評価方法 	<ul style="list-style-type: none"> ●留意点

		<p>表現の自由が奪われると、どのような社会になるのだろうか。</p>
(5)	<ul style="list-style-type: none"> ○課題について記入する。 ○ペアで交流(1分) ○全体で交流(3分) 	<p>評価①</p> <ul style="list-style-type: none"> ・排除された人の「法律違反ですか?」という声に触れる。
(4)	<ul style="list-style-type: none"> ●私たち主催者が政治に対して、自由に意見が言えなくなる。 ・権力に都合のよい社会になってしまう。 ・立憲主義ではなくなる。 ・民主主義とはいえない。 ・少数意見が尊重されない。 	
		<p>3人の声(国民の声)を政治に届けるためには、どうしたらよいのだろうか。</p>
(6)	<ul style="list-style-type: none"> ○課題について記入する。 ○ペアで交流(1分) ○全体で交流(3分) 	<p>評価②</p> <ul style="list-style-type: none"> ・首相官邸「首相官邸に対するご意見・ご感想」 ・内閣府「国民の声」について触れる。
(3)	<ul style="list-style-type: none"> ○振り返りシートの記入をする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・今日の振り返りを発表させる。
(1)	<ul style="list-style-type: none"> ○数名発表する 	<ul style="list-style-type: none"> ・ヤジ排除については資料集の通り、刑事訴訟はされないが、現在、民事訴訟が行われている。

・ 成果

提案内容として、「単元デザイン」の工夫となった。1回の授業だけでなく、単元を貫いて、生徒にどのような学びを獲得させるのが授業のポイントになった。学習者が自分の視点で、見方・考え方を働かせながら、ペア学習やグループ学習で知識を定着させながら子どもたち自身がまとめに向かって主体的に取り組む姿が見られた。

次年度以降も、役員の提案授業を継続させていく。

3. 専門部会第二次研究協議会での交流研究

(1) 交流内容 (公開授業交流 動画視聴)

2年生 地理的分野 日本の諸地域 —「九州地方」—

・ 授 業 者：下山 望 教諭 (石狩市立花川北中学校)

・ 本時の目標：「九州地方は災害に備えてどのような対策をしていくのが良いだろうか」

①本時の様子

段階	時間	学習活動	教師の指導・支援	学習評価
導入	5分	○前時までの確認 ○九州ではどのような災害が多いのか確認	①九州の豪雨災害(2020年7月) ②熊本地震(2016年4月) ③新燃岳の噴火(2011年1月)に絞って、動画で紹介	
九州地方は災害に備えてどのような対策をしていくのが良いだろうか				
展開①	25分	○①豪雨②地震③噴火について、班ごとにテーマを指定し、被害の状況についてまとめる →A-Fの記号と被害の状況を関連させて、グループで話し合い整理する。	【ワークシート①を使用】 ◆それぞれの災害ごとに、資料を提示し読み取らせる。 ①豪雨災害の被害の状況 ②熊本地震の被害の状況 ③霧島山噴火の被害の状況 その他、必要な情報をインターネットで検索させ補足させる	評価①
	20分	○それぞれの災害被害の原因が、「地形的な影響か」「人為的な影響か」の視点でまとめる →ワークシートに記入 →付箋にも記入し、ウェビングマップにまとめる	◆ワークシートには、原因の理由を記入させる ◆付箋は、人為的は「黄色」地形的は「青色」に分けてペンで書かせる	評価②



展開②(2時間目)	20分	○前時の確認 →被害の原因を整理し、ウェビングマップにまとめる	◆被害に対して、原因との関連が明確になるように、整理させる。 →みんなが話し合いに参加できるように配慮する	評価②
	30分	○今後、その災害を防ぐためにどのような対策が必要か考える →「現実プラン」「夢プラン」に分けて記入 ※個人で考察し記入 ↓ ※グループで交流して、付箋に記入しマップに貼る	【ワークシート①を使用】 ◆「現実プラン」は10年後を、「夢プラン」は100年後を目安に考えさせる ◆「防災」の視点と「減災」の視点で対策を考えさせる	
展開③(3時間目)	5分	○前時の確認 →他の班の状況を確認させる	◆それぞれのウェビングマップを画像にして電子黒板に映す	評価②
	15分	○これからそれぞれの対策を行う上での優先順位を考える →「現実プラン」「夢プラン」ごとに「ベスト3」を決める	【ワークシート②を使用】 ◆10年後、100年後に達成できそうか、どれを優先させるか。 ◆お金、規模、人数、技術的に可能かどうか考えさせる。	
	10分	○発表準備・リハーサル →シナリオをもとに、役割分担をして発表させる	◆協力して行わせる	
	15分	○発表 →班ごとに前に出て行う。	◆周りに伝わる声で行わせる	
終末	5分	○災害の対策として、何を重視すべきか個人でまとめる。 ○振り返りシートの記入	◆2, 3人に発表させる	

② 分科会での協議内容

- ・「単元デザインの工夫」で、他地域との関連性について。
- ・夢プランについて、今後より現実的な解決策などを考えさせるのか

③ 成果と課題

- ・単元デザインに留まらずに、地理全体を貫いて課題を設定した点。
- ・現在の課題だけでなく、夢プランとして自分たちが生きていく未来のことを話していた点。
- ・知識が足りない部分もあり、根拠が弱かった点が課題。

(1) 交流内容（公開授業交流 動画視聴）

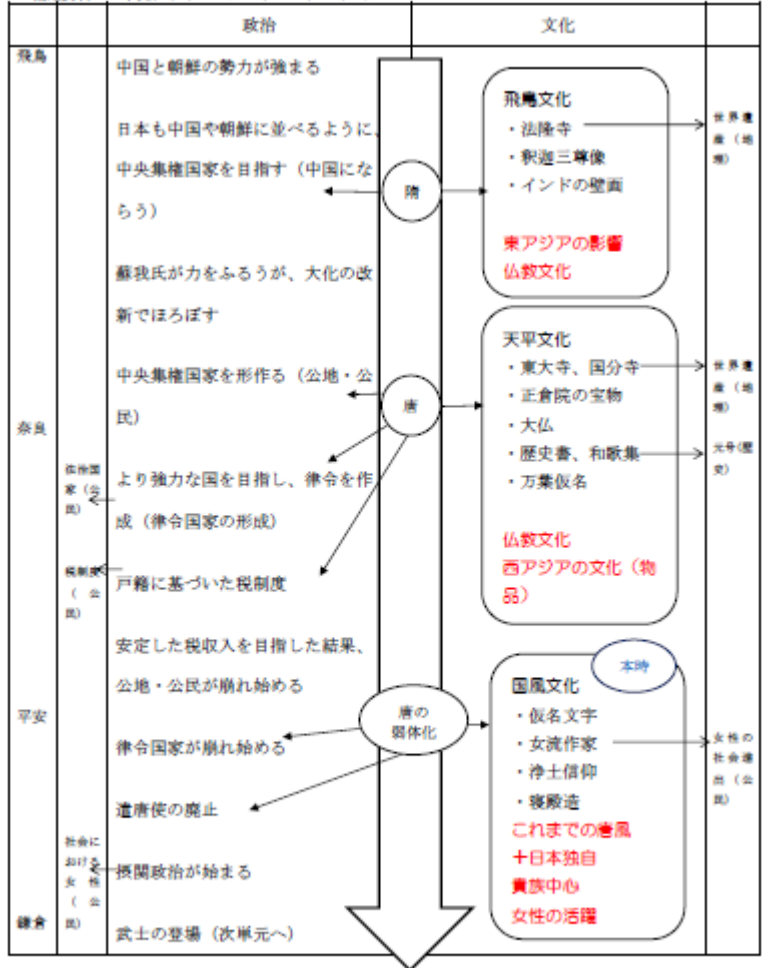
1年生 歴史的分野 古代までの日本「古代国家の歩みと東アジア」－国風文化－

- ・授業者：廣中 未来 教諭（石狩市立花川中学校）
- ・本時の目標：「古代の日本の文化は、どのように変化してきたのだろう」

①本時の様子

	学習活動	教師の指導・支援	学習評価
導入	・前時のノートを見返しながら一問一答に答える ・資料の人物が誰なのかを答える	・前時の内容に関する一問一答を出す（口頭） ・楽書部の資料を見せる ・「源氏物語」の内容を紹介する ・ワークシートを配布する	
課題把握	・学習課題を把握する ・ワークシートに学習課題を記入する	・学習課題を提示する	
	古代の日本の文化は、どのように変化してきたのだろう		
展開	活動1 飛鳥文化・天平文化と国風文化を比べて比較することで、どのように変化してきたかを考える		
	・資料を見て、どの資料がどの文化のものかを考える ①衣服 聖徳太子の服―春絵巻古墳の絵―十二単 ②文学 なし―万葉集―枕草子 ③文字 なし―漢字―仮名文字	・電子黒板で飛鳥文化、天平文化、国風文化の資料を写す ・数々に発表させる	①
	・資料を見て、どのように変化してきたかを考える <予想される生徒の答え> ①ひらひらした服から着物になった 中国風から日本風になった ②文学が生まれた 女性の作家が登場した 歴史書から物語になった ③文字ができた 漢字からひらがなになった 女性がひらがなを使っている	・電子黒板でYチャートを見せながら3つの視点について説明 ①政治の変化 ②生活の変化 ③東アジアとの関わりの変化	
	・Yチャートが完成したら、Teams内のYチャートに簡単に書き込む。（各班）	・Yチャートが完成したら Teamsに書き込むように指示をする	①
	活動2 文化の変化が起こった背景を、Yチャートを用いて3つの視点から考える		
	・文化の変化が起こった背景を3つの視点で捉える	・Yチャートが完成したら Teamsに書き込むように指示をする	①
	・Yチャートが完成したら、Teams内のYチャートに簡単に書き込む。（各班）	・Yチャートが完成したら Teamsに書き込むように指示をする	①
	・Yチャートが完成したら、Teams内のYチャートに簡単に書き込む。（各班）	・Yチャートが完成したら Teamsに書き込むように指示をする	①
	・Yチャートが完成したら、Teams内のYチャートに簡単に書き込む。（各班）	・Yチャートが完成したら Teamsに書き込むように指示をする	①
まとめ	・Yチャートが完成したら、Teams内のYチャートに簡単に書き込む。（各班）	・Yチャートが完成したら Teamsに書き込むように指示をする	①
終末	・本時のふりかえりをワークシートに書く	・電子黒板に「枕草子」の一文を映して、内容を紹介する	②

<補足資料1>単元デザインのプレインストーミング



変化する東アジアの影響を受け、日本の政治と文化も変化している



② 分科会での協議内容

- ・当時の文化と現在の文化をつなげた視点について。
- ・I C T機器を効果的に使うため、どのようにしたらいいか等。

③ 成果と課題

- ・ブレイン・ストーミングで可視化した単元デザイン。授業者自身で知識のつながりや指導の整理ができた。生徒自身がブレイン・ストーミングを行うことができるとうい。
- ・文化＝社会、生活の変化の読み取りがわかる資料の提示を行うとなおよかった。

(2) 協議内容（レポート交流を含めて）

討議の柱 I

公開授業の題材について、今後の授業に取り入れたり、役立てそうな事は何か？
本日の授業以外の展開をするとしたらどのような展開があるか？



討議の柱 II

日常の実践において、悩みや疑問などについて交流を図る。

分科会では、視聴した研究授業についての話し合いの他、第二次研究協議会に持ち寄った実践レポートの交流を行った。部会員の意見を検討し、一昨年度と同様、小グループでのレポート交流に加え、日常の実践等での悩みや各校での実践の工夫などを交流する形態で実施した。

「一人の百歩より百人の一步」という石教研の理念に基づき、「今後の授業づくりに生かされるものを互いに交流し持ち帰る」というねらいは、これまでと同様である。今年度の研究の重点である「思考・判断・表現の力を高める単元デザインの工夫を通して」生徒の資質・能力を高めることについて、活発な交流がなされた。

次年度も同様の形態で実施し、レポートの提出率や参加率を一層高め、有意義な時間となるようにしたい。

Ⅲ. 教育課程の研究

1. 研究の経過

今年度は、主に次の点について重点的に取り組んだ。

- (1) 新学習指導要領と新しい教科書についての情報収集と分析
- (2) 年間指導計画の題材一覧の作成
- (3) 「知識・技能」、「思考力・判断力・表現力」についての評価の情報収集と分析

2. 研究の成果・課題

昨年度は新学習指導要領の全面実施に向けて、教科書の分析や重要語句の太字集などの提供を行ったが、今年度は評価についてとそれを生かした指導についての情報収集と分析を行った。大きな変更点となる評価の3観点については、事前に部会員にアンケート調査を行って、実態調査をして分析し、情報公開することで部会員の情報交流ができた。次年度も今年度の研究、情報交流を行ってきた評価について様々な新たな課題が予想されるが、有益な情報を部会員に提供できるよう努めたい。

Ⅳ. 実技・理論研修会

1. 研修会の内容

北広島市立広葉中学校の堀部秀成教諭および光野明彦教諭に、「Google Chrome を使った社会科教育の在り方」と題してご講演をいただき、部会員とともに考えていった。

全市町村から部会員が集まり、Google Chrome のクラスルームやスライドでの共同作業体験、Google Forms でのアンケート集計の方法などについての研修を行った。石狩市ではMicrosoft Teams が使われているが、基本的なソフトの内容については差異が少ないため、どの市町村でも実践的に使える ICT 利用について深まる研修であった。

2. 研修会の成果

部会員のアンケートの中でも要望が多かった、「社会科教育における ICT の活用」について、光野教諭を中心に、講演・実演をしていただき、部会員が実践しながら質問や疑問に答えていただいた。あくまで ICT 機器を使うのが目的ではなく、手段や方法であることを確認し、授業での効果的な使用方法、評価の際にも使えること等を学び、実践力を高めることができた。大変有意義な研修会になったと考えている。

Ⅴ. 部会研究の成果と課題

1. 成果

研究主題「変化が激しい時代を乗り越え、自ら社会を創造する子どもの育成」を設定し、研究を進めている。主題設定の理由について、前述の通りであるが、「変化が激しい時代を乗り越え」るのは子どもたちに限ったことではなく、私たち社会科教師にも突き付けられている現実だと捉える。私たち自身が時代の流れに対応し、今年度から全面実施された新学習指導要領に沿って、「自ら社会を創造する子ども」を育成していかなければならない。今年度も新型コロナウイルス感染症の影響により、以前のように公開研究授業等の実践研究を推進していくことが困難だったが、新しい研究主題を設定したねらいや取り組む研究内容を部会員に理解していただき、昨年度からの部会員の実践を深めることができた。また、例年作成しホームページで公開している「プロジェクト研究員による試案」を今年度も作成した。実践研究のイメージを部会員に持っていただき、実践やレポート作成の参考として先行的に研究を進め、さらにプロジェクト研究員による提案授業をリモートで行うことで、研究授業者及び、部会員に実践のイメージをもってもらうのに有効であった。

2月には各市町村の第三次研究協議会で部会員にレポート提出をしていただき、管内での実践の情報交流を

行なっていきたい。充実した実践やレポートが揃っていることに期待したい。

今年から、新学習指導要領の全面実施に際した取組として、昨年度、教育課程委員によって作成された『教育課程（展開編）』を参考に、新しい教科書について次年度も年間指導計画作成の一助として活用していただければ幸いである。

2. 課題

部会員数の減少などにより、公開授業を 3 本の公開から 2 本の公開へと変更している。しかし、研究や公開授業の質を落とさないために、来年度も役員による提案授業を試行したいと考えている。今年度も新型コロナウイルス感染症の影響により、思うように部会の研究活動ができず、制限された部分もあるが、来年度も状況を鑑みながら、部会員全員で新たな研究に取り組んでいただきたい。今後 AI 化が進んでいく社会の中、困難な状況、変化が激しい状況下でも、力強く自分の意思をもち、考え、堂々と未来へ向けて歩いていく生徒の育成のために、我々教員も一歩ずつ研究の成果を導き、部会が一丸となって今後も取り組んでいきたい。

(文責 佐藤 泉英)